

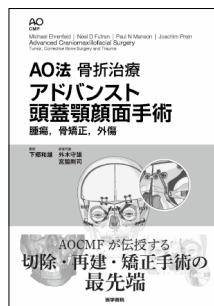
書
評

AO 法骨折治療 アドバンスト頭蓋顎顔面手術 腫瘍、骨矯正、外傷

原著：Michael Ehrenfeld, Neal D Futran, Paul N Manson,
Joachim Prein
監訳：下郷和雄
訳者代表：外木守雄，宮脇剛司

A4・頁 720 2023 年 11 月 定価：41,800 円(本体 38,000 円+税 10%)
[ISBN978-4-260-05081-4]医学書院 刊

<評者> 三谷 浩樹 (がん研有明病院頭頸科部長)



「これは手術かな……」と考える患者を診たときに、CT/MRI、触診/視診から「どこまで切ればよいのか」を考えるが、いざ手術が始まれば次々と現れる動脈・静脈・神経の処理が待っており、術者には迷っている猶予はない。例えば下顎歯肉癌では、Ca 断端に近づくことなく下顎周囲組織をフリーにする必要があり、そこからいよいよ下顎骨の処理に入っていく。レスプロソーで骨を切る時間はごく一瞬であるので、「刃を当てる位置、角度、力加減」がベストでなければ、術前に思い浮かべたとおりの切除にならないし、少しズレただけでも場所によっては、その後の再建計画にも影響を及ぼすことになる。

本書『AO 法骨折治療 アドバンスト頭蓋顎顔面手術』は、そのような頭蓋・顎顔面骨の手術に携わる医師にとって、基本から応用までを網羅した良い指南書である。第2部の「下顎の切除と再建」を例に挙げると、骨切りの基本法から下顎再建法まで、項目ごとに実践に沿って、立体的なイラストとともに詳しく述べられている。この挿絵は、切除前/切除後の様子がわかるように本文とマッチしており、実際の手術の「一瞬の骨切除」の際にも、術者の脳裏にイメージが浮かび上がり、正しい切除ラインをトレースする助けになるであろう。

口腔がんでは下顎辺縁切除にとどまらず、下顎区域切除・再建を行う機会をたびたびあるが、切除範囲は

個々の症例ごとで異なるため、複雑な動きを再現するのにはどのような方法がよいのか、多くの術者が悩んでいる実情がある。例えば下顎再建において、再建後の偏位は限りなくゼロをめざすが、術前 CT を用いた 3D プリンターによるカスタムメイドの実体モデルで下顎カーブを再現する場合、死腔を埋める軟部組織/皮島との関係から腓骨のどこを使うか、スクリュー孔をどこにうがつかなど、下顎の位置/動きが最適になるようにその場での微調整が求められる。実臨床では「計画どおりだからこれで良いはずだ」と突き進むのではなく、三次元的な下顎の動きを考慮しながら少しずつ修正を施す必要があるため、「これではうまくないな……」という場面に遭遇したときは、何とかして良い工夫/施策を生み出さねばならないが、本書では随所に解決につながるカギが述べられている。各項目を読み解くと、先達のやり方を目学問/耳学問で学んだことを思い出し、「そういったメカニズムであったか」と改めて知識が整理されていった。

本書は定型的な手術方法から、さらに発展したケースへの対応まで、平易に訳された文章とイラスト/写真でわかりやすく紹介されており、「トラブルが起これにくいやり方」をめざし、自己の能力として定着させるにはおあつらえ向きの良書である。座右の書としてすぐに読み返せるよう、耳鼻咽喉科/口腔外科の初学者からエキスパートまで、幅広くお勧めしたい。